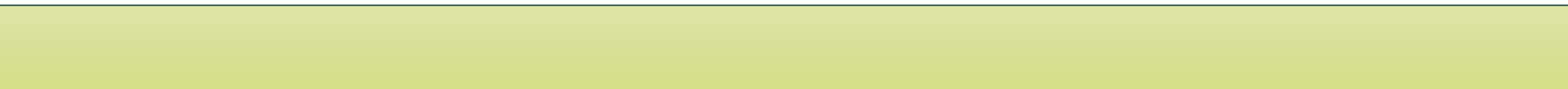


「みんな笑顔で、とてもやさしい。」

パキスタン カラチ日本人学校



- カラチ日本人学校は、どんな学校ですか？と尋ねたときに、本校の二年生が答えた言葉です。
- 児童生徒数、たったの七名（小学部六名・中学部一名）。一人一人が常に前向きで、互いを思いやり、太陽のような明るい存在です。誰かが困っていると、「大丈夫だよ。一緒に頑張ろう。」
- と笑顔で声を掛け、手を差し伸べる優しさをもっている、そんな素晴らしい子どもたちが集まった学校が、カラチ日本人学校です。歌う時には大きく口を開け、その歌声がカラチの大きな空に響き渡る。授業では、自分の考えを真っ直ぐに伝えようとする姿が見られる。全員が日本に一時帰国した今、目を閉じると、そんな子どもたちの姿が目浮かび、懐かしさや愛おしさで、胸がいっぱいになります。
- 世界で四番目に古い校舎だった本校は、五十年ぶりの校舎移転をやり遂げ、児童生徒・学校・保護者・日本人会が一体となって、新しい時を刻もうとしていた矢先のことでした。

- 新型コロナウイルスの感染拡大と、それに伴う医療崩壊と治安の悪化。
発端は、感染した巡礼者がイランからパキスタンに帰国したときからでした。
それから爆発的に感染者が増加し、四月十七日時点で、七千名を超えました。
もともと医療設備が脆弱なパキスタンに感染者数拡大が重なり、深刻な状況に陥りました。感染が囚人にも広がり、それを抑制するために、政府は四千人を超える囚人を解放するなど、カラチに住む日本人にとって、日に日に不安材料が増えていく一方でした。
- 保護者の方々は、子どもたちを預ける不安感が募り、感情的になったり、先行きの見えない状況に恐怖さえ感じたりしていました。
- このような状況を鑑み、学校として、学校運営委員会との連携のもと、主に次の四つの手だてを講じ、検討、実施しました。

(一) 学校を臨時休校とする際の『ガイドライン』の策定

- 本校の危機管理マニュアルには、疫病が流行した際の対応と、その手順が示されていませんでした。感染者が日本人と、日本人以外に見られた場合とに大別し、それぞれのケースで、学校行事や授業等をどのように扱うのか。また、授業をする場合は、各教員宅、オンラインでの授業展開も視野に入れた内容としました。

(二) 協議と共通理解の場の設定

- 学校運営委員会・育友会（保護者と教員が主体となって行事等を運営する組織）に持ち掛け、企業側・保護者側の視点で協議する場の設定をしました。これにより、ガイドラインを更に成熟させ、共通理解を図り、足並みを揃えることができました。
- さらに、全員の帰国を視野に入れたオンライン授業の具体案、会計や現地スタッフと詰めるべき内容（スタッフ給与・光熱費等の支払い・運営全般に係る事項等）についても協議し、具現化と安心感につながる有意義な話し合いとなりました。

(三) カラチと日本を繋ぐ役割として

- 帰国前に、通常の編入手続きに加え、子どもたちが通う予定の学区の各教育委員会への連絡を手分けして行いました。帰国時の転入手続きの方法、必要な書類の確認等をはじめ、保護者が市役所等のどこに出向き、その際に何を持参したらよいのかなど、考えられる全てのことを事前に確認し、保護者に情報提供しました。
- また、日本の学校にも問い合わせ、今後の学校との手続きや帰国予定日の連絡も併せて行いました。北海道・新潟・東京・神奈川・愛知にわたり、私たちが繋いでいくことで、保護者の方々の不安を和らげることができました。

(四) オンライン授業の整備と、教員間の連絡・文書管理システムの構築

- I C Tに長けた教員が中心となり、スカイプでのオンライン授業の整備をしました。情報リテラシーの観点から、ネット使用時のマナーの事前指導、アカウントや用途別のスカイプ内ルームの作成、本格的な学習支援前の教職員と児童生徒との練習会の設定へと進めました。

- 教職員間の報告・連絡・相談・文書提案は、ラインワークスを活用し、アプリ内で意見を交わし、学校長の決済、具体的な行動へと繋げました。
- 全てが初めてのことばかりでした。各国の日本人学校の先生方の取り組みを情報提供してもらい、試してみる。課題を改善する。それを繰り返すことで、少しずつ本校の実状に合った方法が見えてきました。カラチではロックダウンが続き、教員間で話し合う時間が十分にとれませんでした。限られた時間の中で、テーマを厳選し、協議を重ねることで、互いの結束力がより強固なものになったのを肌で感じました。
- 運営委員会の方々の行動力と経験値、保護者の方々の協調性、そして何よりも、子どもたちが我慢し続け、それでも各家庭で自分にできることを探し、主体的に行動する姿そのものが、私たち教員にとってのかけがえのない財産であり、喜びになりました。

- 現在は、本校の学校再開が全く見通せない状況です。日本各地にいる子どもたちがカラチに帰ってくるまでの期間、一人一人の学習面のサポートと心のケアを、効果的且つ、いかに継続して進めていくのかが課題として残っています。その課題解決に邁進すると共に、子どもたちが輝ける様々な行事や取り組みを、学校長をはじめ全員で精選・再構築をしていきます。
- 「みんな笑顔で、とてもやさしい。」
- 子どもたちの笑顔を迎える準備を、一つずつ、丁寧に、進めていきたいと思っています。